

集団の一員としての役割を実行できる子どもを育てる学級活動の在り方

- 係の活動を生かした「気づく」「味わう」「発揮する」の三つの段階の設定を通して -

教育経営部領域教育班 長期派遣研修員（築上町立椎田小学校 教諭） 百留 裕幸

1 研究主題についての説明

(1) 主題の意味

ア 「集団」とは

「集団」とは、「成員が互いに影響し合い、特定の共同目標をかかげ、多少とも共属感を持ち、組織をつくり活動する複数の人々の集まり」¹⁾である。本研究では、特に学級集団を対象にする。なぜなら、学級集団は、子どもが相互にかかわり合い、集団の向上に寄与し、自他の成長に役に立つ活動を通して、自己が実現でき、子どもが今後生きていくときの社会性の育成に大きく影響するからである。

イ 「集団の一員としての役割を実行できる」とは

「集団の一員」とは、「所属する集団に対する愛着や尊敬、感謝の念を抱く一人の集団の形成員」とする。「役割」とは、「集団の一員として他の成員から期待された行動様式」である。役割には二つの機能がある。一つは、目標達成のために努めることである。二つは、集団維持に貢献することである。目標達成に努めることが集団の維持に貢献し、集団の統一を維持することが目標を促進するというように、この二つの機能は、相互に関連し合っているのである²⁾。

本研究における「集団の一員としての役割を実行できる」とは、「目標達成と集団維持のために、自らにとって困難と思っても、個人や集団にとっての意義を発見し、それを実行し、やり遂げること」である。そのためには、自分の目標を設定する力、計画を立て、実行する力、自ら学級の人やもの、ことに働きかける力を育てることが必要である。

(2) 副題の意味

ア 「係の活動」とは

本研究で言う「係の活動」を学級集団に存在する「役割」とみなす。なぜなら、係を作り、やり遂げることで、自らもやってよかった、やればできるという実感を味わえ、目標達成や集団維持に貢献できるからである。特に、高学年の係の活動は、自分にとって困難だと思っても、実施し、やり遂げることができる力を育てる活動である。

イ 「係の活動を生かす」とは

「係の活動を生かす」とは、目標達成や集団維持のために、創意工夫し、級友と共に活動し、認められる経験をすることで自己効力感を味わえるという特徴を活用して、相互作用をもたらすことである。その結果として、係の活動を行った者は、自分の価値に気づき、自分に自信をもつことができる。

ウ 「気づく」「味わう」「発揮する」の三つの段階を設定するとは

「気づく」「味わう」「発揮する」の三つの段階とは、集団の一員としての自分の課題に気づき、係の活動を遂行するときの課題を克服し、その価値を味わい、自ら主体性を発揮する価値追求の過程である。特に、「気づく」「味わう」段階は、係の活動を生かして目標達成に努める役割が実行でき、「発揮する」段階は、集団にとって意義のある活動を行い、集団を維持するために貢献する役割が実行できる。

(3) 主題設定の理由

ア 社会の要請から

現在を生きる子どもたちには、自分本位な言動をしたり、自分にとって嫌なことや苦手なことを避け、安易な方向に流れたりする傾向がある。それは、少子化が進み、一人一人に手が行き届き、自ら望むものが容易に手に入るなどの生活が送れるからだと考える。

子どもたちは、様々な集団に所属して生活をする。そして、様々な社会生活を円滑にするために自分

にとって困難なことがらに出会う。そのときに、自分で思考を見直したり、受け止め方を見直したりしてやり抜くことが必要である。そのために、学校教育の中で、目標達成や集団維持のために、集団の一員としての役割が実行できる社会的資質を身につけなければならない。そこで、「望ましい集団活動」を通して、「自主的、実践的な態度」を育てる特別活動での研究が有意義だと判断した。特に、集団の一員としての役割が実行できるためには、相互作用が必要である。したがって、相互作用がもたらされる活動ができる学級活動での指導が有効であると考える。

イ 児童の実態から

対象学級の子どもは、学級目標を「最高学年としてのモデルになろう」と決めて、その目標達成に向けて日々活動している。例えば、掃除を最後までやり通したり、学習活動は、教師や級友の話に耳を傾け、真剣に学ぼうとしたりするなど、当番活動や学習ルールを守ることはできている。しかし、学級や級友のために自主的に活動したり、創意工夫をして、課題に挑戦したりすることに消極的であり、集団の一員として行動するまでには至っていない。

そこで、自分で活動を設定し、創意工夫でき、やってよかった、やればできるという実感が味わえ、相互作用が活発になる自発的、自治的な活動である係の活動を行うことで、自分でできる、共に楽しく過ごせるという経験をさせ、積極的に他者に働きかけ、他人を大切にすることができると考える。

以上のことから、集団の一員としての役割を実行できる子どもを育てる学級活動の在り方を究明することは意義深いと考える。

2 研究の目標

目標達成や集団維持のために、集団の一員として生活を営む上での自分の目標を設定し、具体的な計画を立て、自分にとって困難と思ったものでも、個人にも集団にも意義あるものだと価値づけをし、自ら他者に働きかけ、実行できる子どもを育てるために、係の活動を生かした「気づく」「味わう」「発揮する」の三つの段階を設定した学級活動の在り方を究明する。

3 研究の仮説

集団の一員としての自覚をもち、集団生活を営むために必要な社会的資質を身につけるための学級活動の指導において、係の活動を生かした次の三つの段階の設定を行えば、集団の一員として生活を営む上での自分の目標を設定し、具体的な計画を立て、自分にとっての困難なことでも価値を見だし、自ら他者に働きかけ、実行する、集団の一員としての役割を実行できる子どもが育つであろう。

集団生活での自分の課題に気づき、それを解決するために、係を設定する「気づく」段階

自ら活動の計画を立て、実行することで、課題克服への喜びを感じる「味わう」段階

集団にとって意義あることに挑戦する新たな活動を決め、自分の力を発揮する「発揮する」段階

4 研究の内容

(1) 「気づく」「味わう」「発揮する」段階の設定

「気づく」段階では、集団の一員として、自分が積極的に働きかければ、学級がこのように変わるという目標を立て、自分の課題に気づくことをねらう。そのために、学級生活での自分の在り方を問い、課題を発見し、解決に向けて、級友のためにできることを係として設定する。

「味わう」段階では、集団の一員として活動することで、学級の人とかかわり、級友の温かさ、一員としての喜びを味わうことをねらう。そのために、「 な人の喜び

顔をみるために」という活動の対象を明らかにした係の活動計画案の作成を行い、実行する。

「発揮する」段階では、集団の一員として、学級の人ともの、こととの関係を築くために、積極的に自分から働きかけ、自分の力を発揮できることをねらう。そのために、集団にとって意義のある活動と思うことを自分の活動として決定し、実行する。

(2) 検証の方法

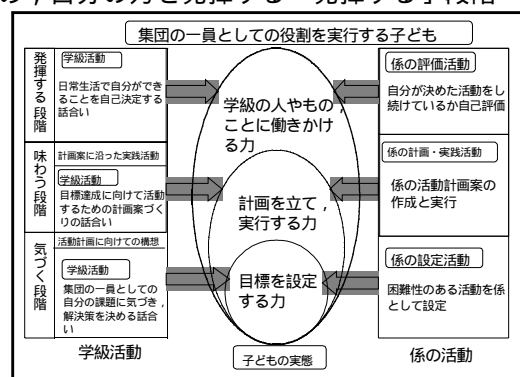


図1 研究構想図

検証の方法として、6月と12月に行った質問紙法による事前調査で、集団の一員としての意識を「学級の人とのかかわり」と「自分が決めた活動を遂行した喜び」の変容で検証をする。

(3) 事前調査

調査期日 平成18年6月26日 調査対象 A町立B小学校 第6学年C組26名

学級の一員としての意識調査を15項目で調査した。その一つとして、「汚れた給食配膳台に気づいたときの行動」について自由記述で回答させた。その結果、「進んで自分から拭く」という関心タイプが6名、「だれかがする」という依存的なタイプが17名、「めんどくさい」という無関心的なタイプが3名いることが分かった。その他の項目からも、級友を喜ばせたいなど他者への関心が薄い傾向が伺えた。

5 実証授業の実際

対象 A町立B小学校 第6学年C組 26名

実証授業を「気づく」「味わう」「発揮する」の三段階を表1のように3時間で構成した。

表1 実証授業計画

段階	議題・題材	ねらい	主な学習活動	主な教師の手立て
気づく段階	最高学年のモデルに成長するための係を決めよう。	集団の一員として、自分が積極的に働きたければ、学級がどのように変わることができるかと目標を立て、自分の活動が設定できるようにする。	学級生活アンケートの結果を提示し、集団生活を営む上での特徴に気づく。最高学年としてのモデルになる」と自分で決めることを考え、付箋に書く。学級や級友のために「これなら、自分ができる」ということを係として設定する。	計画委員会による原案の作成と提案。アンケート結果の活用。学級生活としてのモデルの方法を係の形で目標を達成するための成功の姿の設定。
味わう段階	よりよい係の活動をするために係の活動計画案を作る。	自分の活動の効果がでるような具体的な「活動の目的」「内容と方法」「成功した姿」が書けるようにする。	自分の決めた係を実行するには、どんな計画を立てて活動の目的、活動内容、方法、「成功の姿」「自己評価」が活動計画案には必要だと共通理解する。自分の決めた係の活動計画案を作成する。	級友から自分の係への期待調査の活用。人の心が読みたい、という活動の目標を設定できたなら活動が成功と見なすのかという成功の姿の設定。
発揮する段階	係の活動	一人の心が読めるように計画を立て、自分自身で実行し、やればできることを味わうことができるようにする。	自分で作成した活動計画案に沿って、日々活動をする。日々の活動を自己評価する。	帰りの会で自分のうれしかったこと（自分が決めた係の活動を見て自分自身で評価した）を発表し、自分自身で評価する。
	学級活動	最高学年としてのモデルになるために日常生活で自分のやるべきことを決めよう。	今までの係の活動を反省する。最高学年としてのモデルについて再話し合い、モデルについて共通で理解する。学級の人々が気持ちよく生活するために、というテーマを掲げ、日常生活での自分のやるべきことを考え、自己決定する。	れいかつ（その結果）達成度アンケートを行い、結果をまとめる。話し合いで活用する人です。と発問し、モデル像が明らかになる。学級の人々が気持ちよく生活できるために、という理由を書き出す。よければいいこと。毎日の自己評価（三段階評価と自分がうれしかったことの記述）
実践活動		「学級の人々が気持ちよく生活できたために」を目標に掲げて、自分の決めた活動が実行できるようにする。	自分の決めたことを日常生活の場で自分の描くモデル像に近づくために日々活動する。	

(1) 「気づく段階」の授業の実際

<議題> 「最高学年としてのモデルになるための係を決めよう」

本時のねらいは、学級の一員として、自分が積極的に働きかければ、「学級がこのように変わるだろう」と目標を立て、自分の活動が設定できるようにする。

評価規準は、下のように設定をした。この評価規準は、実践活動も含めて設定している。

十分達成	A: 級友の喜びを第一に考えて、その子にとっては、少々難しいことでも、今学級に必要なものは何かを考えて、係として設定している。
おおむね達成	B: 級友の喜びを第一に考えて、それによって自分もうれしくなるといった自分の価値も考えて、係として設定している。
不十分	C: 「こんなことをするとよい」「こんなことをしたい」ということだけで、今学級に必要なことや級友にこんな点で役に立つといったことまでは考えられずに係を設定している。


ア 自分の課題に気づく話し合い、係を設定する過程の記録

まず、計画委員会が自分たちが作った「配膳台が汚れていたら拭くという人が半分でした。問題だと思いませんか」という問いを提示し、学級の共同の問題に気づけるようにした。

配膳台の汚れに対して「自分が進んで拭く」という子は25名中（欠席1名）5名、「だれかがするだろう」と依存する子は15名、「めんどくさい」と無関心な子は5名であった。子どもたちは、最高学年のモデルとして、自ら積極的に人に働きかける6年生としては、問題であることに気づいた。

本時の授業で、自分の課題に気づくまでの話し合いは、次のとおりである。

「気づく」段階の話し合いの記録

<p>計画：「給食配膳台が汚れたままです。あなたは拭きますか」という問いに半分以上の人が『拭かない』と答えています。あなたは問題だと思いませんか。</p> <p>司会：問題だと思った人は意見を言ってください。</p> <p>C1：係の人だけに任せるとは自分でやるのが大切だと思います。</p> <p>C2：これはみんなで使う配膳台だし、汚なかったら落ち着かないからです。</p> <p>C3：私は全部当番に任せていたら当番が大変だし、気づいた人がやればいいと思います。</p> <p>司会：次は、問題でないと思った人は意見を言ってください。</p> <p>C4：問題ではないと思います。理由は、係の人がいるから係がやればいいと思います。</p> <p>C5：それは自分がする（当番）と手を挙げたのだからしたらいいと思います。</p> <p>司会：この配膳台のことを考えながら、どんな自分を発見しましたか。</p> <p>C6：他の人がやればいいという自分を発見しました。</p> <p>C7：配膳台が汚れているのに係の人に押しつける自分です。</p> <p>C8：配膳台が汚れていると気づいたら係の人といっしょにふく自分です。</p>	 <p>資料1 話し合いの場面</p>
---	--

話し合いの後半で、係設定の条件「協力」「役立ち」「喜び」を決定し、それに基づき、一人一人が、係案を付箋に書き出し、係を設定した。A児は、次のような反応をしながら、係を設定していった。

< A児が係を決定するまでの過程 >

司会：では、条件に合う係を考えてください。付箋紙1枚につき係を1個書いてください。
 A児（資料2の右側のような学習プリントの「条件 喜び」に「かざり係」を書く。）
 司会：書いた係の中から「これならできる」と思う係の一つを選んで画用紙に書いてください。
 A児（なかなか係を決定することができない。周りの級友が「かざり係と書いたら」と声をかける。しかし、係を決めることができない。どんな係をしようか悩んでいる。）
 司会：画用紙を黒板にはってください。自分が黒板にはった係を自分の係として決定します。
 A児（まだ、何にしようか悩んで決定できない。）
 教師：「教室をかざるような係をしたいんですよ。挑戦してみてくださいはどうか。」と声をかける。
 A児（授業終了後、「教室を飾るとみんな喜び、きれいだから『かざり係』をする。」と決定した。）

A児は、学級生活への関与は依存的なタイプである。給食配膳台が汚れていても、気づいた人や当番がすればいいという考えであった。しかし、本授業では、学級のため、級友のために、自分に何ができるか必死に悩む姿があった。集団の一員として活動をしようと思変容している姿だといえる。

このA児のように、学級生活に対して、依存的、無関心的だった20名のうち、10名は「人の喜びことをしよう」と積極的に係を決めていった。

イ 結果と考察

全体で14種類の係が決まった。その過程を分析すると、評価規準Bにあたるものとして「新聞を使っているいろいろな出来事を書いたらみんなが楽しめる」と自分のためにもなるし、級友の役に立つなど、「みんなが喜び」「役立つ」と書いている子が65%で17名であった。

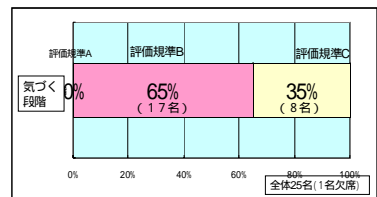
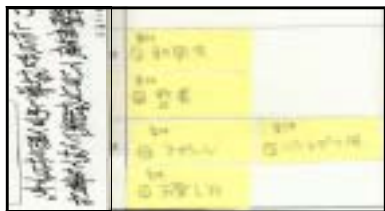


図2 評価規準ごとの人数

今までの自分を振り返らせ、学級の現状に気づかせ、付箋紙を使って多くの係案を書かせ、条件に基づき、設定させたことは、評価規準Bの子らにとって有効であったといえる。しかし、その他の35%の8名の子は、「教室をきれいにしたい」や「楽しい集会をしたい」という記述であった。学級のために何かしたいという気持ちをもっている。そこで、「今なぜその係が必要なのか」といった問いかけをして、係のもつ意味や学級の一員としての考えることの大切さに気づかせるべきだったと反省している。



資料2 B規準の児童の学習プリント

(2) 「味わう」段階の実際

< 議題 > 「よりよい係の活動をするために活動計画案を作ろう」

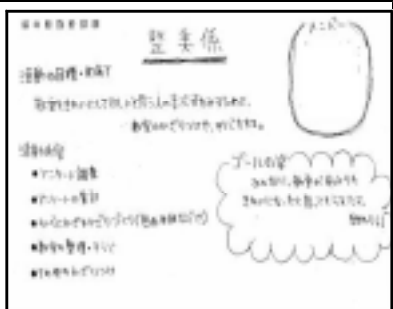
本段階のねらいは、自分の活動の効果がでるような具体的な「活動の目的」「内容と方法」「成功した姿（ゴールの姿）」が書けた係の活動計画案を作成できるようにする。評価規準は、次のように設定する。この評価規準は、実践活動まで含んで設定している。

十分達成 A：具体的な計画を立て、実行するとともに、新たな活動まで創造して実行している。
 おおむね達成 B：具体的な活動計画を立てて実行し、その喜びを感じている。
 不十分 C：具体的な計画を立てたが実行にあたり、消極的である。

ア 係の活動計画案作成までの展開

まず、計画委員会の提案者が計画案の項目の案を提示した。それについて、質疑応答、意見交換、決定までは、次のように展開された。「味わう」段階の話し合いの記録

司会：係の活動計画案の項目について話し合います。どんな項目がいいかを考えてください。
 C1：係をする目標とメンバーを書くところがあるといいと思います。
 C2：どんなことをするのか（活動内容）を書くところがあればいいです。
 司会：提案者は、黒板にあがっている項目以外で提案はありませんか。
 計画：係の活動がどうなったら、成功かを判断するために、ゴールの姿が必要だと思います。そして活動ができているかどうか判断する自己評価がいいると思います。
 司会：ゴールの姿と自己評価が項目に必要なという提案がありました。質問はありませんか。
 C3：ゴールの姿とは、どんなことですか。
 計画：「ができるようになったら」「他の人が」と言ってくれたら、「の印が7割程度貯まったら」など係の活動の終わりのきっかけのことです。
 司会：一つ一つの項目を確認していきます。活動計画案の項目は、「メンバー」「活動目標」「活動内容」「ゴールの姿」「自己評価」に決定します。



資料3 A児の係の活動計画案

前時「かざり係」と決定したA児は、きれいな教室環境で、快適に生活したいと同様の考えをもつ3名の子と共に、係の活動計画案を立てた。資料3がそれである。そこには、「教室をきれいに飾ってほしい人のために」という具体的な対象を掲げている。また、アンケートしたり、季節の飾りを作ったり、手間と時間のかかる計画を立てている。自分から積極的に働きかけることを喜びと感じているといえる。

イ 係活動の実際

一ヶ月間、係の活動をした。A児は、計画案に従いながらも、飾り物の作成の時間が確保できないときは、家に持ち帰って作成した。本人も「教室を飾るために、季節にあった花を作った。作った飾りをみんなに『すごいね』や『かわいいね』と言われてうれしかった。音楽会の練習で昼休みに作れなかったので家で作ったりした。」と述べている。これは、集団の一員としての喜びを味わっている姿である。

このA児のように計画案になかったことを自ら行い、新たな活動を作り出した子は5名いた。

ウ 結果と考察

計画案に具体的な活動対象と内容を書いて、活動した評価規準B以上の子は14名(54%)だった。A児のように、それ以上に新たな活動した5名(19%)は、評価規準Aといってよい。計画案を具体的に書くだけでなく、係の活動中に「きれいになったよ」や「丁寧に作ってるね」といった級友からの温かい言葉をかけてもらったからこそ、新たな活動を作りだすことができたといえる。

気づく段階	0%	65% (17名)	35% (8名)
味わう段階	19% (5名)	35% (9名)	46% (12名)
			全体26名

図3 評価規準ごとの子どもの数

係の活動が相互作用をもたらしたのである。第一時で係の活動について評価規準Cと判断した8名(35%)の子らは、「つい遊んでしまい、活動ができないことがあった」など行動を反省する感想を述べている。



「気づく」段階と比べて、積極的に働きかける喜びを感じているようである。

そこでも、「することが見つからず、活動ができなかった」という感想に止まって資料4 10月の飾りいる子もいる。係の進み具合を話し合い、次の課題を決めることや係の活動の評価をして、他者からの言葉を聞くなどの手だてをとるべきであったと反省している。

(3) 「発揮する」段階の実際

<題材> 「最高学年としてのモデルになるために日常生活で自分のやるべきことを決めよう。」

本段階のねらいは、「集団の一員として、人との関係を築くために自分の力が発揮できる新たな活動を決定できるようにする」ことである。評価規準は、実践活動を含めて次のように設定した。

十分達成	A: 自分の働きかけで、こんな学級になると学級の姿を明確にし人やもの、ことに積極的に働きかける。
おおむね達成	B: 学級の姿は明確ではないが、人やもの、ことに積極的に働きかける。
不十分	C: 人やもの、ことに積極的に働きかけない。

ア 新たな活動を決めるまでの展開

一ヶ月間の係の活動の終了後、学級目標への達成を計画委員会が調査した。達成度は、7割だと判断した子が全体の半数いた。そこで、どんなことをすると達成度が高まるかを話し合うことになった。そのため、もう一度、最高学年としてのモデル像を確かめることにした。話し合いは次のように展開した。

「発揮する段階」の授業の記録

- T : 最高学年のモデルとは、どんなことを考えて行動できる人のことでしたか。
 C1 : 自分より下の人のことを考えて行動する人のことです。
 C2 : 低学年のことを考えて行動する人のことです。
 C3 : 人の役に立つことや協力しようと考えて行動している人のことです。
 T : 自分以外の人のことを考えることをモデルと考えているようですね。
 こんな行動をすると他の人がどんな気持ちになるのですか。
 C4 : うれしい気持ちやいい気持ちになります。
 T : C6くんと同じ考えの人は手を挙げてください。(25人挙手)
 C5 : ぼくは、モデルになることを考えて行動している人だと思っています。
 T : モデルとは自分も他の人もいい気持ちになることを考える人だと考えていいですか。
 学級での日常生活で、他の人を気持ちよくすることはできませんか。
 C6 : 朝登校して教室に入る時に相手を見て元気にあいさつをするのいいと思います。
 C7 : 朝のあいさつがフラスアップをしたらいいと思います。
 C8 : 昼休みにロッカーの整理をすると後ろが気持ちよくなると思います。



資料5 班でモデル像の相談

この結果を踏まえて、各自、自分が最高学年のモデルとして、ふさわしい行動をとろうということに決めた。A児は、「思いやり」のある人になることを決意した。それができるための行動として「朝登校したら、多くの人に目を合わせてあいさつをする」と決めた。理由は、「朝シーンとなると寂しい気

持ちになる。明るい学級にしたい」であった。当初、学級の生活に依存的で消極的だったA児は、人とかかわりを築くために、自信をもって、この行動を決めたことが分かる。

イ 決定事項の実践

A児のように「あいさつ」をすることなどのコミュニケーションの活動をすると決めた子は、22名である。その他に「学級・学校の整備」をすると「もの」にかかわると決めた子が4名であった。

その活動期間として設定できたのはわずか6日間だったが、5日以上活動した子は16名であった。3日以上は5名であった。2日以上は5名であった。最高学年としてふさわしい行動ができることを決めて活動したことで、学級の人とかかわりが増えて、子どもに積極性が表れてきたと判断する。

ウ 結果と考察

こんな学級になると考えて、自分から積極的に人やもの、ことに働きかけた評価規準Aの子は3名(12%)である。こんな学級になるということまで考えられないが、働きかけることを決めて実行できた評価規準Bの子は16名(64%)である。決めることはできたが、積極的な活動にまで至っていない子は6名(24%)である。

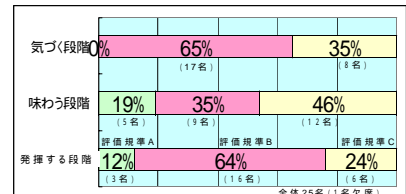


図4 評価規準ごとの子どもの数

係の活動を通して、人とかかわることで、学級生活を快く過ごすことができ、集団の一員として自分にもやれるという自己効力感をもてた子どもが増えてきたと判断できる。

(5) 全体考察

集団の一員としての意識を調査するために、6月と12月の実態調査で「汚れた給食配膳台に気づいたときの行動」について自由記述で回答させた。結果を示したものが図5である。12月の結果は関心タイプは8名、依存的なタイプは18名、無関心的なタイプは0名であった。依存的なタイプから関心タイプへ、無関心的なタイプから依存的なタイプに変容した子はそれぞれ3名いる。

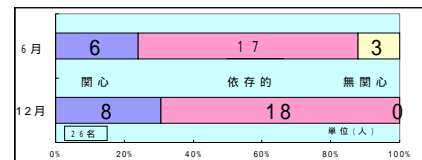


図5 学級の一員としての意識度

この子どもたちの記述から共通していえるのは、「配膳台は汚れていないかな」「まずやってみよう」と学級のものに対する関心の表れである。それは、集団の一員としての自分の目標を立て、

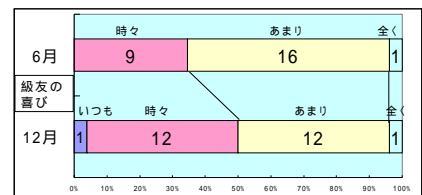


図6 学級の人とかかわり

係として、学級の人やもの、ことにかかわった経験が有効であったと考える。それは、図6の「日直など割り当てられた仕事でどうしたら級友が喜ぶかを考えるか」という問いで、半数が級友のことを考えて行動しているという結果からも分かる。

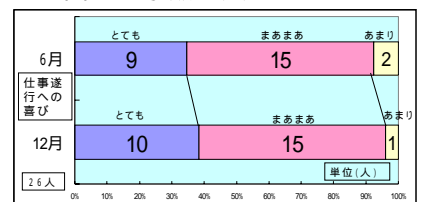


図7 仕事遂行への喜び

しかし、まだ依存的なタイプの子どもが存在する。原因は、自分の目標が個人の課題達成の目標に止まったからだと考える。集団の一員としてのやり遂げた喜びを味わえていないのである。それは、

図7の「任された仕事をやり遂げた喜びを味わったか」の調査で若干の変容しか表れていないことから分かる。「なぜ今、係が必要なのか」と問うたり、自分の活動の評価を他者の言葉で聞くことができたりと、集団の一員として自治的にかかわることの大切さに気づかせる手だてが必要であった。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

集団の一員としての自分の存在を考えず生活していた子が、自分の生活の在り方を問い、自分にとって、集団にとって意義のあることと判断した係の活動を実行することで、学級の人やもの、ことを考え集団の一員としての自分の存在に気づくことができようになった。

(2) 今後の課題

社会的資質を育てるために話し合いの活動、係の活動、集会の活動を関連させた年間計画を作成する。学級生活上の問題を自分たちが提起し、解決できる学級の仕組み作りをする。

<参考文献> 1)見田宗介(1988)社会学事典 弘文堂 2)岩田茂樹(1986)「特別活動の心理」東洋館出版社